第 2 章

東日本大震災の被害地域における初動活動

復興計画試案

震災直後の 2011 年 4 月より 6 月までの約２ヶ月間に、３つの津波被災市町村に対して復興計画を検討し提案を行った。ほぼ全域が津波の浸水を受けた宮城県 M 町には震災発生後１ヶ月の時点までに復興都市計画の試案を作成し町側に提案を行った。またこれとほぼ平行し岩手県 O 市への復興試案を作成し５月中旬に市側に提案、さらに 6 月末には宮城県 N 市 Y 地区に事業計画を含む復興計画案を作成し市長に提出した。M 町への計画案検討着手時にはまだ現地への交通手段が限られており現地調査も復旧作業に迷惑をかける危険性があった。そのため計画案検討の基礎情報はネットとメディアの情報源をメインに収集した。しかし津波の陸上での溯上挙動などの現象に関する知識や情報も乏しく、津波到達域の範囲の設定に関しても津波の最高水位（海際）と 3 次元の地形情報より単純想定したため、現実とは異なる結果となった。O 市での検討においてはこの反省をもとに被災直後の衛星画像を分析し正確な実浸水被害領域を割り出し計画案策定のベースとした

2.1.　リアス式海岸 M 町の震災復興に向けた試案

2.1.1　被災前の土地利用概況

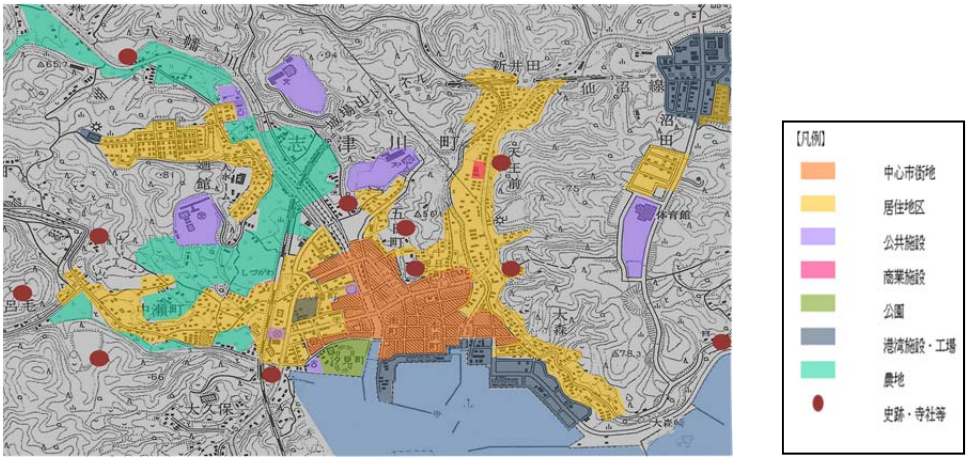

図 1　土地利用概況

2.1.2　被災状況と課題

【被災状況】

・高台部分を除く地区のほぼ全域が津波の浸水を受けている。

・町全体で 5,362 世帯中、3,877 戸が全壊。その過半が志津川地区と考えられる。

図 2　被災状況

【復興に向けた課題】

・津波の脅威から開放された、居住地区・中心市街地の再建。

・高齢化に対応したコンパクトな市街地形成。

・完全に守りきれない低地部分は、数十年・数百年スパンの大津波に対しては、ある程度の浸水を許容する土地利用とする。

・浸水レベルを避けた、災害に強い交通動線の確保。

・明快で効果的な避難動線の確保。

・地域の歴史と記憶の継承。

2.1.3　震災復興にむけた試案「漁業地域モデル」の概念図

【土地利用】

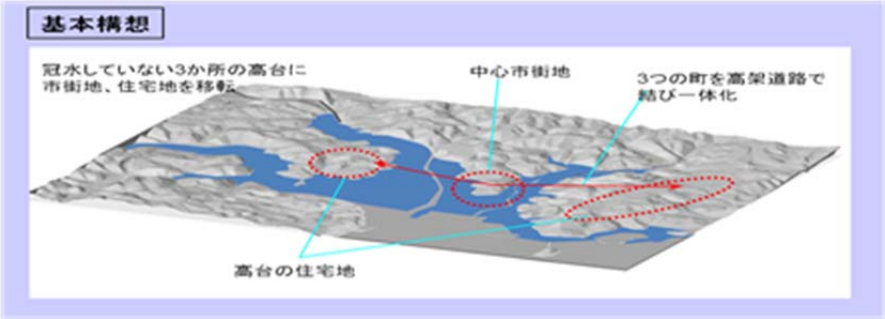

図 3　基本構想

・「安全市街地＝高台」 による「住」と「生活サービス」の再生と「生産市街地＝低地」による「職」＝「漁業」と「農業」の再生
・「安全市街地＝高台」の形成：旧市街地の背後の丘陵地から切土、旧市街地部分に盛土を行い、津波の脅威から開放された「安心な生活」を確保。
・「安全市街地」の土地利用は、居住地区、中心商業地区、行政施設、医療福祉施設、学校等とする。
・「生産市街地＝低地」の形成：罹災した低地（海辺）には主たる産業である「漁業」、「農業」等「職」のための土地利用に原則として限定する。
・復興初期に一時的に必要な「瓦礫」処理（集積・分別）エリアは、最終的には公園又は農業用地として再生する。
・再生可能な瓦礫は一部盛土への活用を図り、地域の歴史と記憶を継承するための「想：メモリアル施設」として再生する。
・ 「生産市街地＝低地」においては、罹災時に人的避難を支えるハード（緊急一時避難施設の一定間隔配置）・ソフト両面を備える。
・市街地の再生に際しては、高齢化・地球環境時代に向けた新たなエコ・コンパクトシティを目指す。

【動線・インフラ】

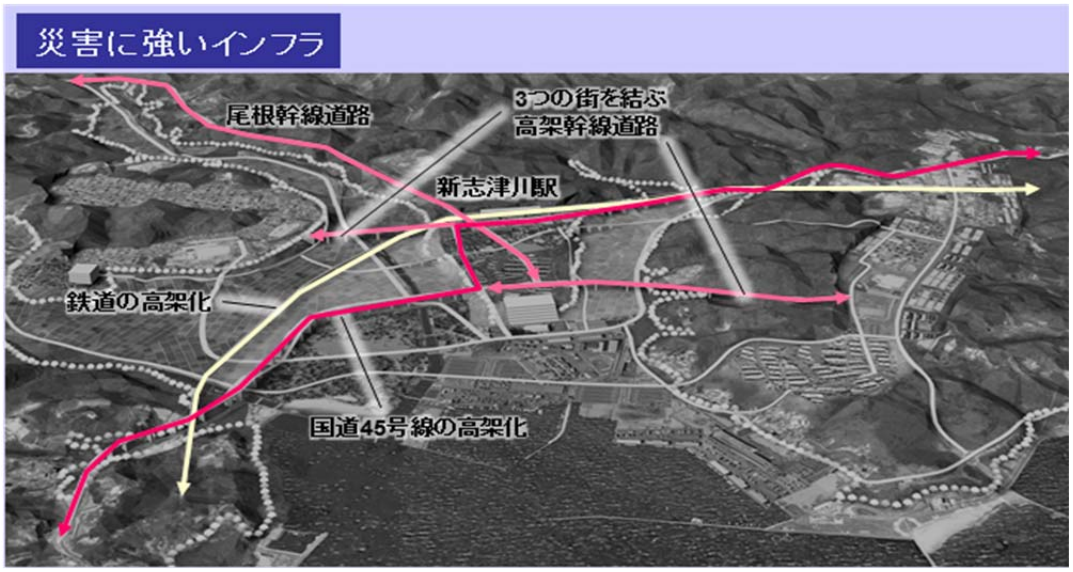

図 4　災害に強いインフラ

・地域の孤立化を避けるため、主要な交通動線（海岸沿いルートと内陸ルートの 2 方向の幹線道路、及び鉄道）の高架化・耐震化を図る。
・安全市街地と生産市街地との高低差には、日常的な生活動線としても活用されるバリアフリーも考慮した避難階段・避難道路を一定間隔で設置。

【安心安全な高台住宅地】

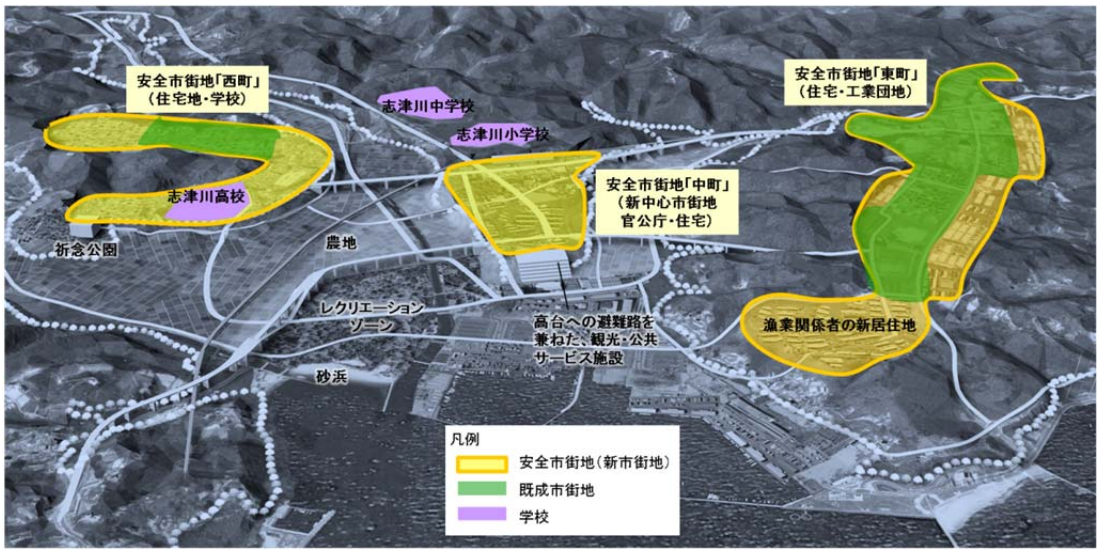

図 5　住宅地の高台移転と地域産業再生

・安全のための基盤整備

宅地造成（切土、盛土）による高台（安全市街地）の整備。

・町の中枢機能を集約

高台にコンパクトシティを整備

住宅地の他、新駅、役所、病院、学校等。

・地域産業の再生

港の再生

・港機能の復旧

・ロジスティックスの再整備

・加工業の整備

農業の再生

・ドレイン工法による塩の除去

・水田から果樹園へのシフト

2.1.4　復興市街地の土地利用計画試案

【基本的な考え方】

●安全・安心な生活の場の確保　：高台の安全市街地

・旧市街地周辺の丘陵地の切土・盛土造成、保全された市街地の活用により高台に 3 ヶ所のコンパクトな安全市街地を整備する。

・中央の「中町」は、新駅周辺と海側の 2 つの拠点、公共公益施設、居住地区、街の歴史を継承する神社を含み、新たな町の中心となる。

●災害に強い都市の骨格　：浸水被害を受けない交通動線

・鉄道路線・駅位置の変更を行い、中町に新駅を整備。

・浸水を避けて緊急時の物流動線となる尾根幹線道路と地区幹線道路で安全市街地間を結び、低地からの避難動線ともなる「生活道路」等を整備し、冗長性が高く災害に強い道路網を形成する。

●再生の活力となる低地部分の土地利用

・低地部分は、レクリエーション拠点の他、まとまった土地利用を可能にする産業再生ゾーンや農地、今後の活用余地を残したバッファーゾーン等、まちの再生に資する土地利用とする。

●高台と低地を結ぶ　：避難動線と新たな拠点

・安全市街地と低地部分の間は、生活動線・避難動線となる道路や階段等で接続する他、ランドマークとなる集客・交流施設、メモリアル施設等を配置する。

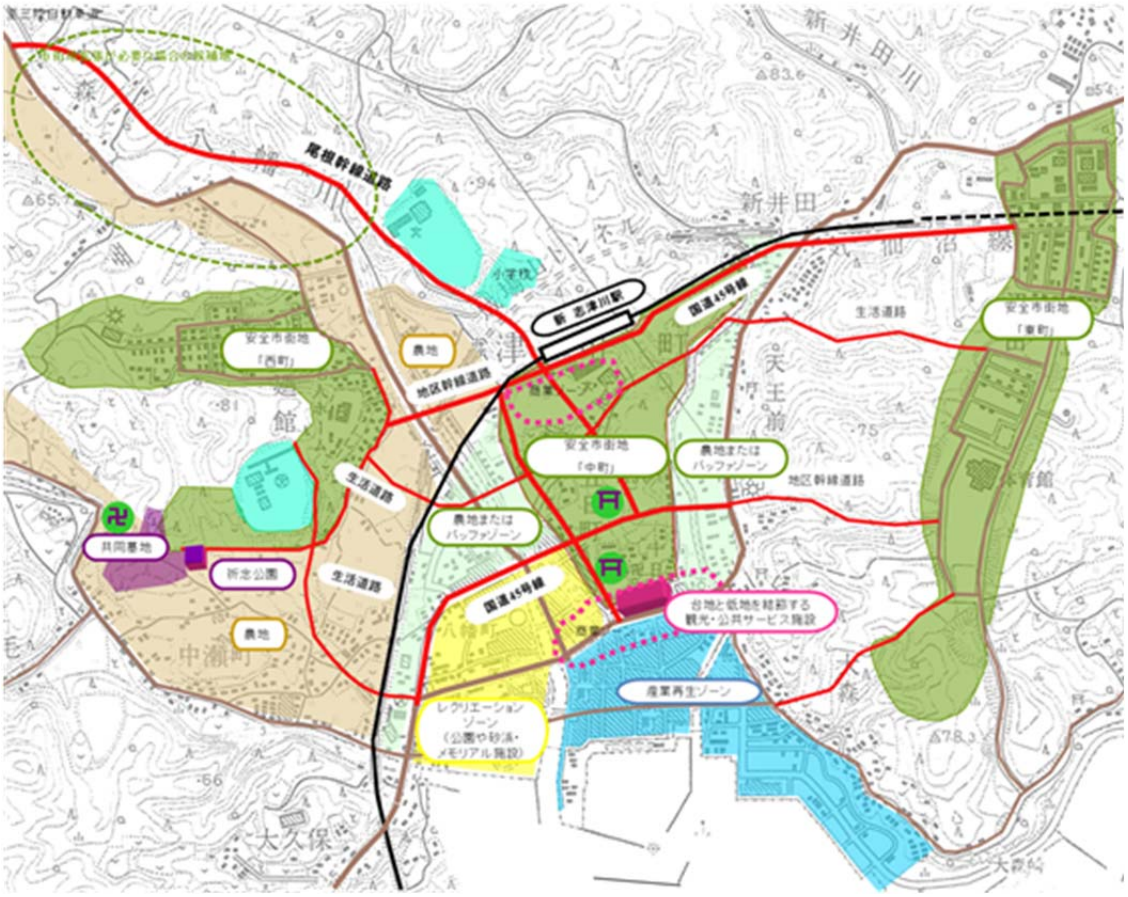

図６　都市利用計画図

2.1.5　南三陸町復興に向けた具体的提案

【試案俯瞰図】

●災害時も生き残る交通インフラの整備

・万が一の場合も浸水被害を受けない尾根幹線道路で、内陸の広域幹線に接続

・安全市街地に　新志津川駅を設置

●高台の安全市街地に居住の場を確保

・コンパクトな安全市街地に居住・公共公益・商業機能を集約

・3 つの安全市街地を高架の地区幹線道路で結ぶ。

●復興のシンボルとなる拠点施設

・高台と低地の結節点に、賑わいの中心となる観光・公共 施設や、地域の歴史と記憶を継承するメモリアル施設を整備する

図 7　試案俯瞰図

図 8　浸水時シミュレーション

【浸水時シミュレーション】

●災害時も安心安全な町

・浸水被害を受けない安全市街地、尾根幹線道路、地区幹線道路、鉄道と駅

・高台への迅速な避難を可能とする道路（車・人）

・明快な避難指標（並木と散策路）

2.1.6　水の記憶

【水・花・路】

・時と共に風化する記憶を人々の心に留め置くため、津波の最大水位ラインに沿い総延長１６ｋｍの花木の並木を植樹する。

・年々立派になっていく 1256 本の木々の多くは早春に花を咲かせ、数十年の時を経ても世代が更新しても、忘れてはならない出来事を永遠に人々の記憶に刻み続ける。

・標高差のない並木の足元には散策の小路を作る。平素は町民や訪問者の憩いの散歩道として、また万が一の際には明快な避難の指標となる。

・樹木は東北地方での生育に適した下記数種の花木から、植樹地の環境に適した樹種を選定する。

①サクラ類　オオシマザクラ　宮城あたりが北限。サクラの仲間の中では、耐潮性がある。

②モモ　　比較的海風に強いと言われる。

③コブシ　神戸で震災復興のシンボルとして使われている。

④モクレン（ハクモクレン）　耐潮性は普通。

⑤ツバキ類　ヤブツバキ

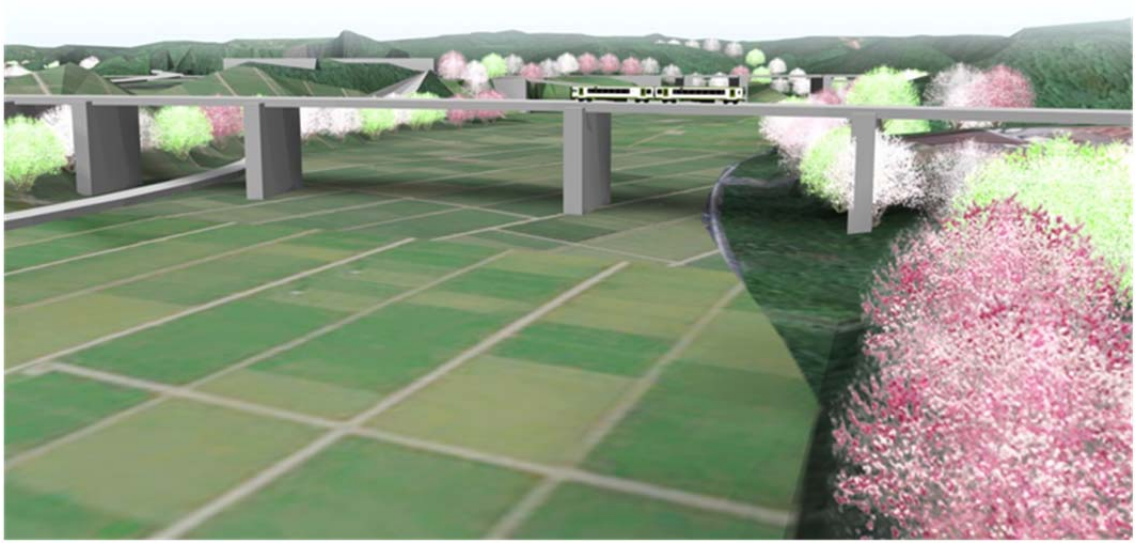

図 9　水・花・路

参考資料

●コブシ

●ハクモクレン

●オオシマザクラ

●モモ

●ヤブツバキ

2.2　リアス式海岸 O 市の震災復興に向けた試案

宮城県 M 町とほぼ並行作業にて、甚大な津波被害を被った岩手県の O 市の復興都市計画を検討し、その成果を O 市に提案した。ただし市長も津波にて亡くなられたため市役所の復興担当の方々にご説明をした。

2.2.1　被災前の土地利用概況

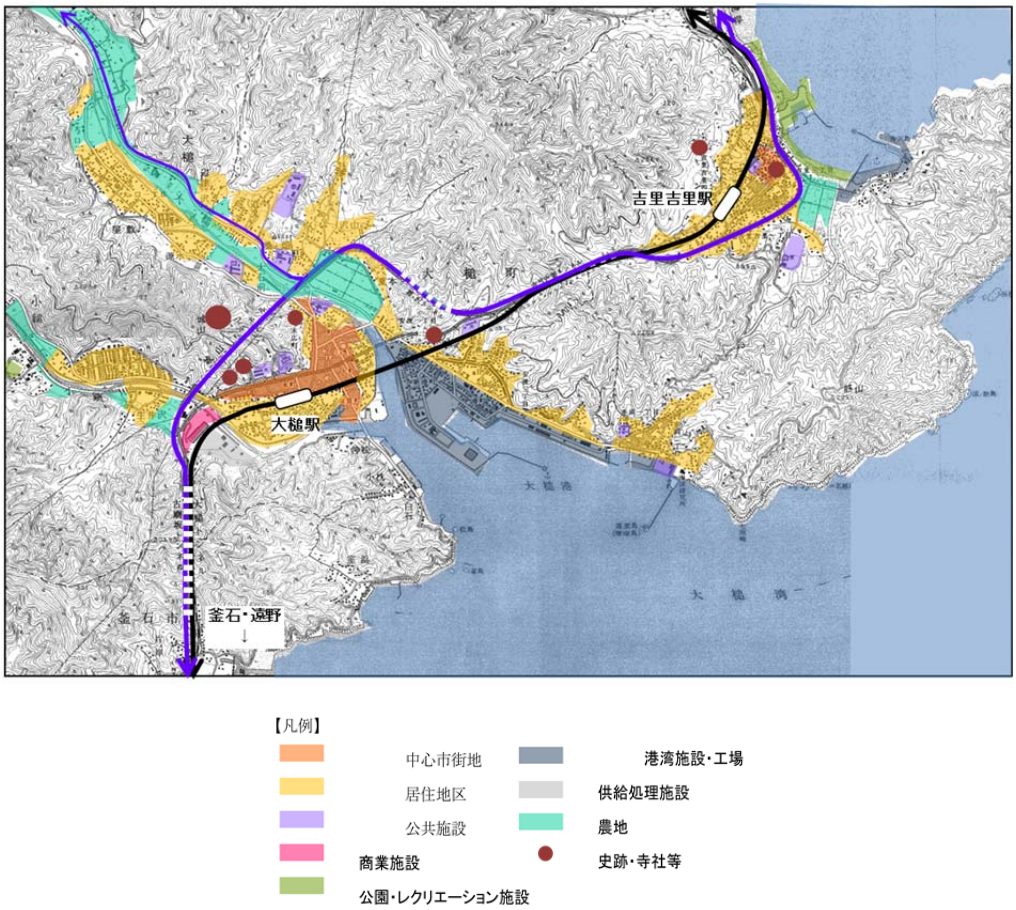

図 1　土地利用概況

2.2.2　被災状況と課題

【被災状況】

・沿岸部～低地部分で津波の浸水を受けているが、内陸側の一部の住宅地は流出を免れている。（ 5/16 現在　町内避難所への避難者：2,033 人、在宅避難者：4,635 人）

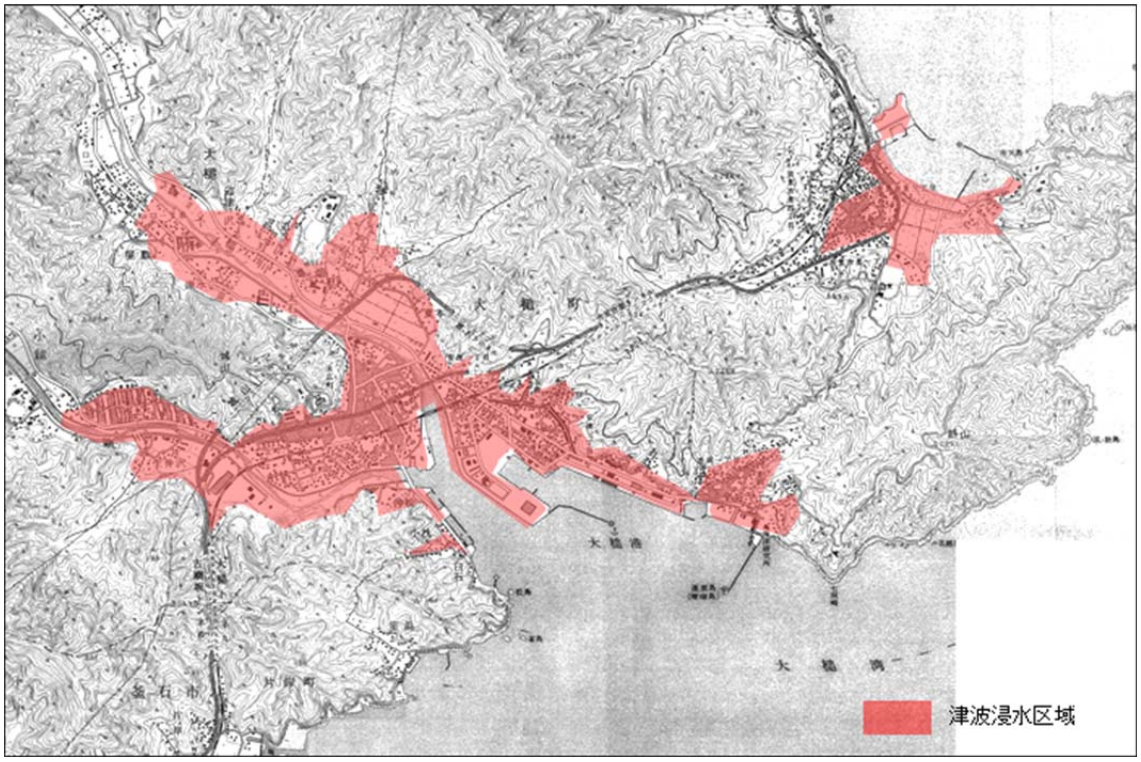

図 2　被災状況

【復興に向けた課題】

・津波の脅威から開放された、居住地区・中心市街地の再建。
・高齢化に対応したコンパクトな市街地形成。
・力強い復興の原動力となる、地域産業の再生と創造。
・災害に強く、耐震性の高い交通動線を複数ルート確保。
・確実な避難を可能にする、避難場所と避難経路の確保。
・地域の歴史を踏まえた、新たな風景の再生。

2.2.3　震災復興にむけた試案「漁業地域モデル」

土地利用

【コンパクトな「安全市街地」の建設 】

・旧市街地の背後の山地からの切土、盛土により、津波の脅威から開放された居住の場を確保
・「安全市街地」の土地利用は、居住地区、中心商業地区、行政施設、医療福祉施設、学校等とする。
土地の高度利用を図り、高齢化・省エネルギーに対応したコンパクトな市街地を形成。
・盛土部分への瓦礫の利用とともに、史跡を活用して地域の歴史と記憶を継承。
・低地部分の土地利用は、港湾・水産関連施設、農地、レクリエーション施設等とする。

動線

【災害に強く、逃げやすい動線 】

・主要な交通動線(鉄道、幹線道路）の高架化・耐震化を図る。

・低地部分と安全市街地の間は、日常的な生活動線としても活用される、避難動線を一定間隔で設置。

3.2.4　復興計画案の骨子

安全な居住の場の確保

・背後の険しい地形の中から比較的緩やかな傾斜面を選んで、**高さ 15～20m の高台**を造成し、居住及び中心市街地の機能を確保する。

・比較的被害が小さく、住居を修理して住むことが可能な「大ケロ」「桜木町」は**堤防を再整備**して安全安心を確保する。

地区の骨格となる動線

・各高台と国道 45 号線とは**高架道路**で結び、緊急時の避難や生活の動線を確保する。

低地部の土地利用と避難の考え方

・漁港周辺には**魚市場や水産加工場などを再興**するが、魚市場や主な水産加工場には**避難場所を兼ねた 5 階建て以上の施設**を作り、緊急時の避難場所とする。

・残った低地部は農業、公園、モニュメントや**自然を復元した地域**を設け、大津波時には浸水を許容させるが、<u>10 分以内に高台へ避難できる道や階段を確保</u>する。

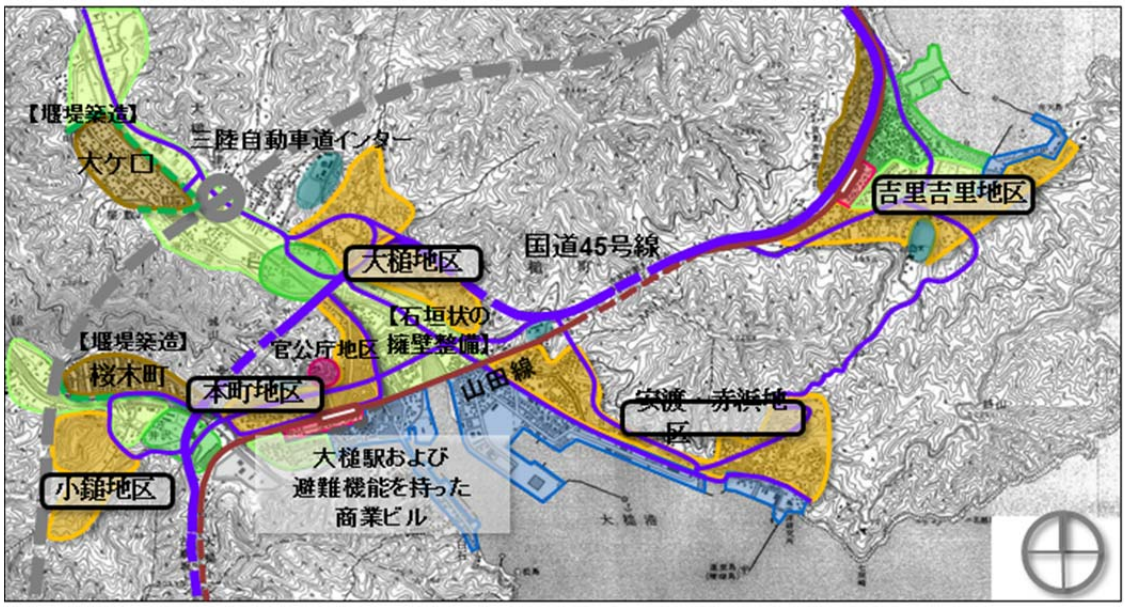

図 3　復興計画案の骨子

2.2.5　各居住地区の考え方

小鎚地区

・大槌川を挟んで桜木町の南側に新たな住宅地を建設する。

本町地区

・旧大槌駅の北側に高台を造成し、主として**行政・公共・商業地区**とする。

・南斜面は、背後の山が山城跡の名跡であること、津波に対して強固な構造とすること、盛土材をできるだけ減らすことなどを考慮して**石垣造**とする。

・また、斜面を利用して、1～3 階に駐車場、4・5 階を店舗とした**低地部からも高台地区からも利用できる商業施設を建設し、低地部から高台への避難路としても活用**する。

・大槌駅はこの商業施設と一体となった高架駅とし、高台及び低地部の両方からアクセスできるようにする。

大槌地区

・国道 45 号線沿いの土地に高台を造成し、**学校・住宅地区**とする。

安渡・赤浜地区

・漁港近くの高台を造成し、主として漁業関係者の住宅地とし、**漁業の職住を分離**する。地形を生かした 2 つの高台間を道路で結ぶとともに、北側の鉄道とのアクセスを確保する。

吉里吉里地区

・既存住宅地区の他南西地区の吉里吉里中学校周辺を盛土し、**高さ 20m の高台に新しい住宅地**を作る。

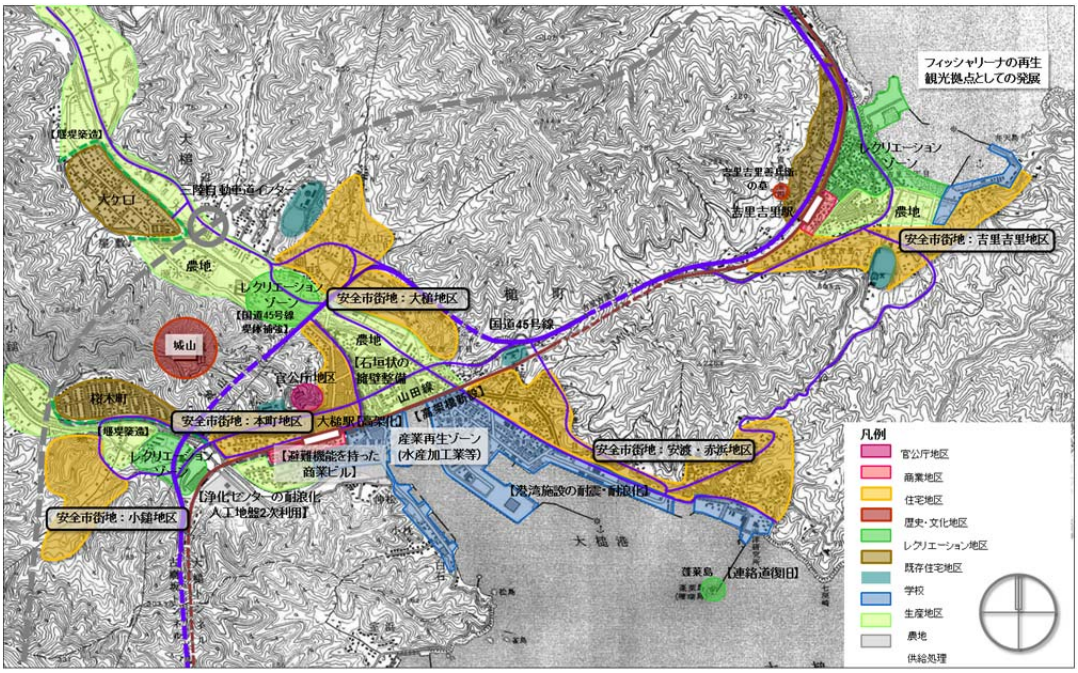

図 4　高台市街地計画・配置図

2.2.6　復興試案の全体イメージと基本コンセプト

【1.安全・安心な生活の場の確保 】

・旧市街地周辺の丘陵地の切土・盛土造成、保全された市街地との融合により、高台にコンパクトな安全市街地を形成する。

【災害に強い都市の骨格】

・町の背骨となる国道 45 号線と建設中の三陸自動車道を結び、災害時にも機能する町外との動線を確保する。

・鉄道路線の高架化、国道 45 号線の高架化・路線変更を行ない、耐震性が高く、浸水被害を受けない、都市の骨格を形成する。

【歴史と未来をつなぐ風景づくり】

・眺望点となる城山から緑の山腹、山麓の安全市街地、低地の生産市街地、漁港に至る新たな三陸の風景を育み、観光資源としても役立てる。

【再生の活力となる低地部分の土地利用】

・港湾部の復旧では耐震化、対浪化を進め、津波を受けても容易に復旧する港づくりを行う。

・低地部分は、特色ある水産加工業や効率性の高い農地の他、観光拠点等　競争力のある産業育成の場とする。

図 5　復興試案イメージ

2.2.7　地域再生のための課題とアイディア

【安全システムの再生】

・都市基盤として高台に居住の場を確保するとともに、産業やレクリエーションの場とな

る低地部分から、津波災害等の際に一定時間内に避難できるよう、高台へのアクセス路、低地の中の避難ビルの配置・整備を行う。

図 6　安全システムの再生

【環境の再生】

・居住の場となる安全市街地はコンパクトに集約し、造成面積を抑えるとともに、車だけに依存しない省 CO2 のまちづくりを進める。風力発電、太陽光等、再生可能エネルギーの導入を進める。川を軸にして、丘陵部の森と低地部の農地、湾内の漁場を、豊かな恵みをもたらす一体的なエコシステムとして再生する。

図 7　環境の再生

【産業の再生】

・基幹産業となる水産業を支える基盤として、災害に強い、津波にあっても容易に復旧できる港湾施設を再構築する。 吉里吉里地区等で進められていた観光施設を再生の上、統一感のある街並み整備により滞在型リゾートとしての魅力を一層向上させる。

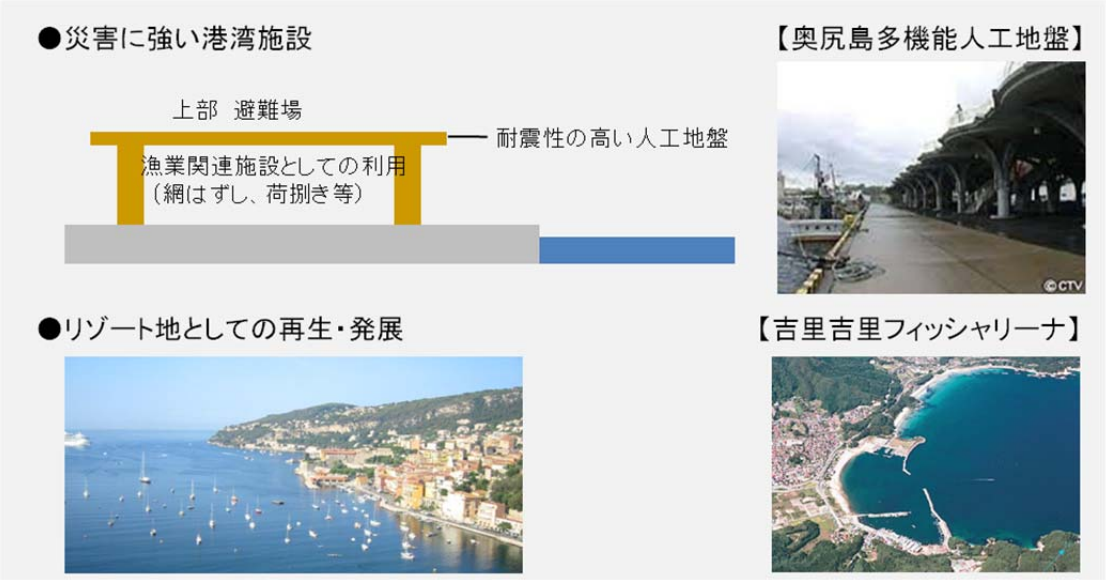

図 8　産業の再生

【風景の再生】

・地域の歴史を伝える山地の史跡や、山麓に築かれる街並み、低地の田園や漁港は、人々の記憶に残る新たな三陸の風景になる。山から見ても海から見ても美しい風景を、地域住民の参加により創り上げていく。

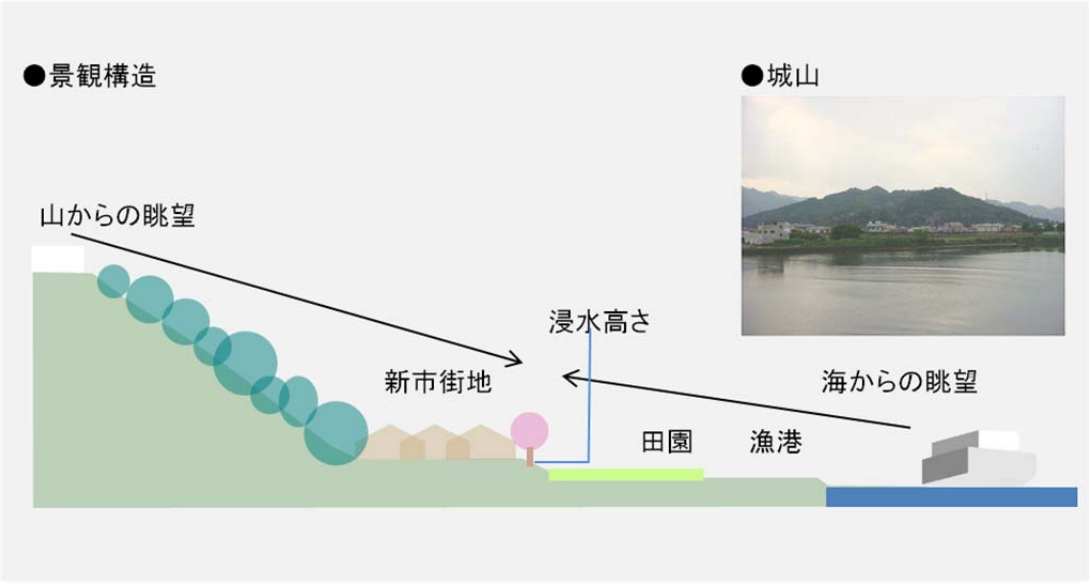

図 9　風景の再生

2.2.8　復興イメージ

【大槌地区】

・安全な居住の場と活力ある生産の場を明確に区分し、基幹産業となる水産業の高度化を中心に、力強い再生を遂げる。

図 10　大槌地区復興イメージ

【吉里吉里地区】

・高台での居住の場の確保とともに、沿岸部ではフィッシャリーナの再生を端緒とし、地域特有の自然景観を活かした滞在型リゾートとして発展してゆく。

図 11　里吉里地区復興イメージ

2.2.9　災害を耐え抜く街

最大級の津波襲来時にも、住民の命と資産を守る、安全市街地と主要交通動線

【大槌地区】

・14m の津波でも被害を受けない居住エリア（海抜１５m 以上の高台＋内陸河岸堤防）。

図 12　災害を耐え抜く大槌地区

【吉里吉里地区】

・19m の津波にも耐えられる海抜 20m以上の２箇所の高台居住エリア。

図 13　災害を耐え抜く吉里吉里地区

【大槌町全域】

・津波襲来時にも、家族と家財を守り、職場などから迅速に避難のできる高台の安全市街地群。それらを結ぶ災害時にも寸断されない主要交通動線（鉄道＋道路）。

図 14　災害を耐え抜く大槌町全域

2.2.10　水の記憶

【水・花・路】

・時と共に風化する記憶を人々の心に留め置くため、津波の**最大水位ライン**に沿い、総延長 23ｋｍの**花木の並木**を植樹する。

・年々立派になっていく 2300 本の木々の多くは早春に花を咲かせ、数十年の時を経ても、また世代が代わっても、忘れてはいけない出来事を永遠に人々の**記憶**に刻み続ける。

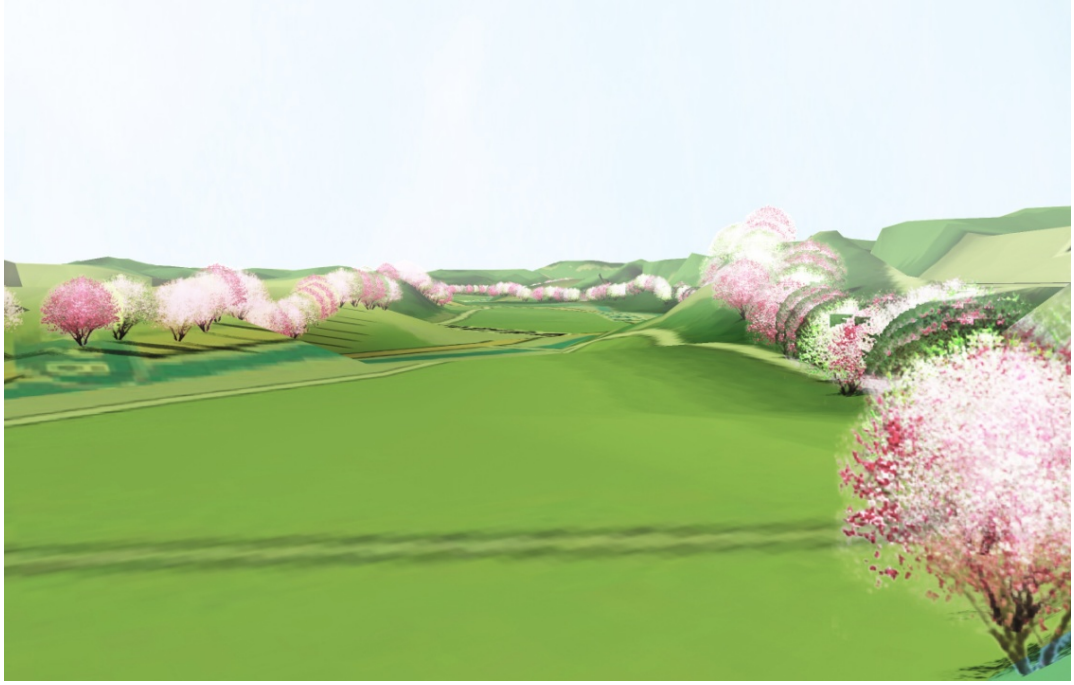

図 15　水・花・路

・並木の足元には高低差の無い平坦な小路を作る。平素は町民や訪問者の憩いの散歩道として、また万が一の際には明快な**避難**の**指標**となる。
・樹木は東北地方での生育に適した下記数種の花木から、植樹地の環境に適した樹種を選定する。

図 16－19　植樹地の環境に適した樹種

【水・花・路（罹災時】
・海抜 12.6mの等高線を結ぶ大槌地区の花木の並木小路。

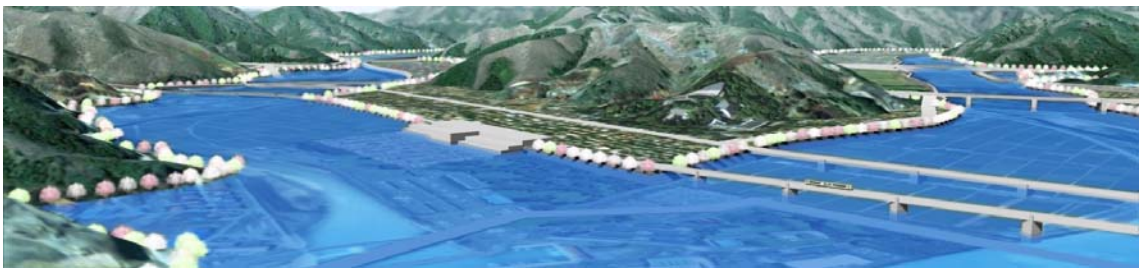

図 19 「水・花・路」（罹災時）

『水は覚えている。』しかし人々も決して忘れない

2.3.　平野部海岸：N 市の震災復興に向けた試案

海岸から続くなだらかな平野に位置する N 市の Y 地区では、震災直後の数メートルの津波により殆ど全ての住戸が甚大な被害を受けた。高台の無いこの地区の復興に向けた試案を作成し市側に提案した。

2.3.1　被災前の N 市 Y 地区

■被災前の閖上地区

●名所・観光スポット

閖上地区の人口(平成23年2月)

	世帯数	人口
閖上一丁目	230	655
閖上二丁目	303	873
閖上三丁目	119	342
閖上四丁目	272	762
閖上五丁目	171	531
閖上六丁目	426	1072
閖上七丁目	305	843
計	1826	5078

閖上地区の産業構成

業種		件数
商業	商店	58
	飲食店・スナック	12
サービス	美容院・理容	11
	塾	4
	タクシー	1
	新聞	1
業務	運送会社	3
	銀行・保険	2
	行政書士	1
水産関連	魚市場、水産加工、釣具	28
農業	倉庫	1

業種		件数
工業、建設	自動車板金、船修理、ボイラー、建設	17
	酒造	1
宿泊	旅館	4
公共公益	郵便局・消防署・警察・集会所・体育館	6
	小中学校	2
	保育所	3
	病院	6
その他	寺社	7

図 1　土地利用概況

2. 3.2　閖上地区再生のための課題

【原位置に残るまちの力強い再生】

・地域産業に従事する世帯のための、安全・安心な住まいの確保

－津波に対する万全な対策を講じ、住み続けるための町を再建する。

・漁業・水産加工業を中心とした歴史ある地域産業の再生

－災害に強い港湾機能を再整備し、働き続けるための場を再生する。

・周辺地域から、あるいは空港利用者も集客する、にぎわいある　まちの再生

－新たな来街者、観光客を誘致できる、まちの魅力の再生。

【移り変わるまちの有意義な活用】

・地区外移転を希望する住民のための代替地確保

－地区外の農地等との土地交換を想定する。

・未来を志向した転出跡地の有効利用

－新エネルギー地区や先端的農業地区への転換をはかり、

「未来へのトップランナー」を目指す。

2.3.3　基本的な考え方

【海際に住むための万全の安全対策】

・海岸沿いの堤防を従来よりさらにかさ上げ・強化して再建する。

・3,000 人が居住可能な、コンパクトな高台の市街地を建設する。

土地利用…　居住地区、中心商業地区、行政施設、医療福祉施設、学校等

・高台・避難ビルに向けて、わかりやすく、逃げやすい動線を整備する。

【地区復興の基盤となる漁港再生】

・従前の港湾地区を中心に、漁港、魚市場、水産加工所等、地区の基幹産業の再生を図る。

・港湾地区内にも避難所を設置し、万一の場合の迅速な避難を可能にする。

【立地条件を生かした新たな魅力の創出】

・地区東部の港湾と貞山堀に挟まれたゾーンでは、周辺地域住民に親しまれた、漁港、魚市場のイメージを再生するだけでなく、水辺を生かした新たな魅力を付加し、近接する仙台空港からのアクセスを強化して（水上バス等)、さらに広域からの集客を目指す。

【広域での展開を見通した未来志向の土地利用】

【貞山堀の「舟の駅」】

・仙台空港から仙台市内に至る貞山堀を利用した観光用の水上交通ルートをつくり、閖上地区もその中の「舟の駅」の一つに位置づける

【アグリ・エコパーク】

・仙台空港から閖上地区まで広がるエリアを、先端的農業、新エネルギー創出、多様な生態系の保全を実践する「アグリ・エコパーク」のエリアとし、閖上地区もその中の拠点

の一つとして、貞山堀の水上交通を利用した観光にも活用する。

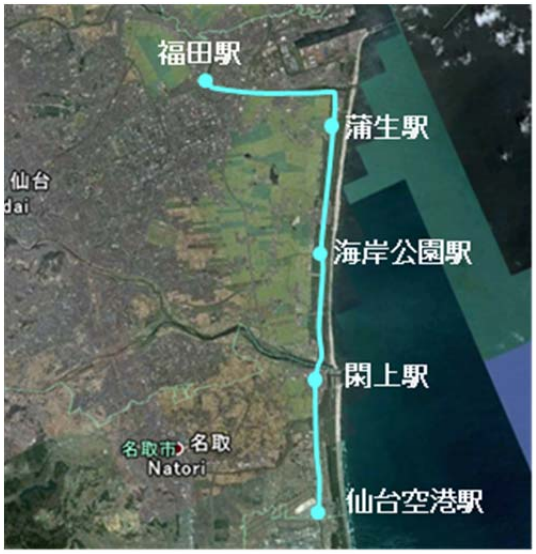

図２　貞山堀の「舟の駅」

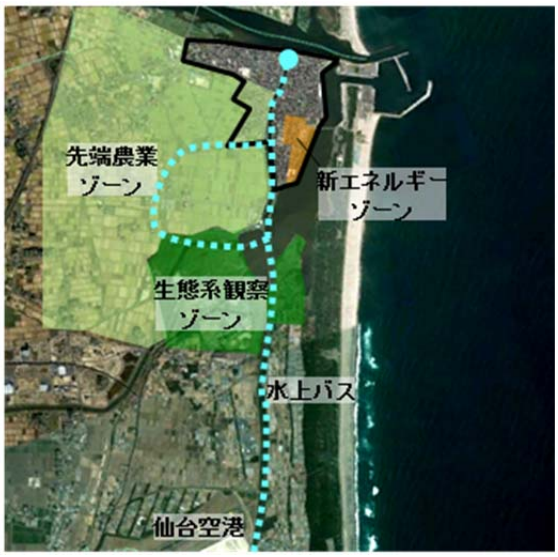

図３　アグリ・エコパーク

2.3.4　土地利用方針

①高台市街地　約 21ha
・住宅　約 1,000 戸
・小学校
・中学校
・その他公共公益施設
・商業施設
②港湾・水産関連ゾーン：約 7ha
・港湾　＋　市場・水産加工等
③集客ゾーン：約 31ha
④サポートゾーン：約 21ha
・農地（内陸側農地との土地交換等）
・高台部学校の校庭
・駐車場　　他

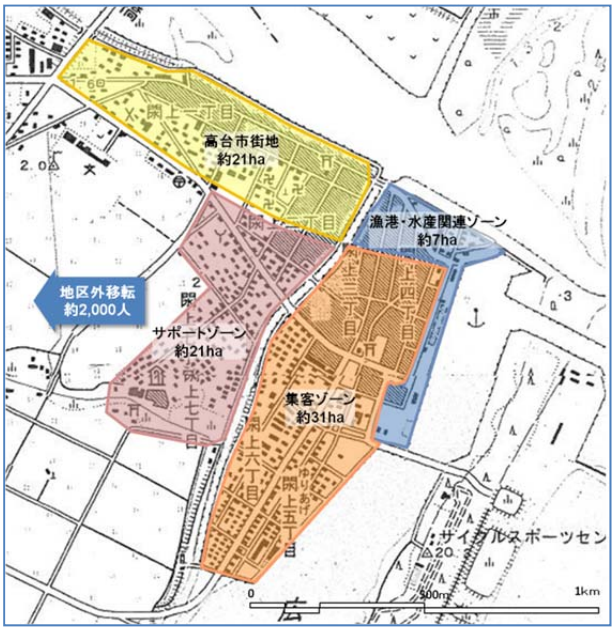

図４　土地利用

2.3.5　高台市街地計画案の骨子

－安全な居住の場の確保と街並みの再生―

・津波を受け流す形状に 10m嵩上げした約 20ha の高台を、名取川の堤防に沿って築造する。

・高台には従前からの居住者を中心とする約 3,000 人が暮らす集合住宅（770 戸）、戸建て住宅（240 戸）と、小・中学校、病院、郵便局、商店等を建設し、住民が安全安心に日常生活を送れる場を確保する。
・極力多くの戸建て住宅を確保し、住宅地内の小公園、低層の商店街等により、以前の閖上地区を思わせる、親しみやすいスケールの街並みを再生する。
・集合住宅や来街者のための駐車場は、高台の盛土の中に収容する。

図５　高台市街地計画・配置図

図６　高台市街地イメージ①

図 7　高台市街地イメージ②

2.3.6　低地部の利用提案：共通する考え方

【基本方針】

・地区の基幹産業である水産業を着実に再生するとともに、昔の面影のある魚市場や朝市を復活させる。

・地区のアイデンティティー受け継ぐ場となっている、日和山を保存する。

・低地部の避難場の安全性を十分確保する。居住の場である高台市街地と、働く場である低地部の連続性を確保するとともに、低地部に高さ 10m以上の避難場所を点在させ、万一の大津波時にも 10 分以内に高台へ避難できる動線を確保する。

・地区の持続的発展に必要な、収益性を持った土地利用を図ると同時に、地区の魅力を再生・発展させ、地区外から人々を呼び込む。

・地区内外を結ぶ必要十分なアクセス動線を確保する。

【基本的なゾーン区分と土地利用】

・港湾・水産関連ゾーン（7ha）…漁港、水産加工場、魚市場といった必要機能を、高台市街地との連続性、地区外への搬出動線に配慮しながら配置する。港の施設は、スロープ部を設け、背後に船を上げて整備する作業空間を設ける

・集客ゾーン　（31ha）…新たな来街者を呼び込み、収益性とまちの知名度を高めるゾーン

・サポートゾーン　（21ha）…農地としての再生の他、新たな収益事業（メガソー

ラー、ハウス栽培)、高台および貞山堀東側の機能を補完するゾーン

【アクセス動線】

・名取駅、仙台空港、仙台駅等と閖上地区を結ぶバス路線の拡充を図る。

・仙台空港から閖上地区まで、貞山堀を利用した水上バスを運行させる。

・旅行会社と提携して閖上地区を観光コースに組み入れる。

【周辺施設・土地利用との関係】

・海側堤防は、かさ上げ・強化を図ると同時に、レクリエーション施設（プール)、サイクリングロード、ゆりあげビーチ）の再生を図る。

・空港から閖上地区までのエリアを、先端的農業、生態系保存、新エネルギーのモデルゾーンに位置づける。

図８　基本的なゾーン区分と土地利用

【A 案】

運河に沿った街並みと、広大な花畑による名所づくり】

・ゾーン別の考え方（土地利用の方針と景観・利用イメージ）

集客ゾーン

（北）

・地区内に貞山堀から運河を引き込み、それに沿ってかつての閖上地区に近いスケールの街並みを配置する。

【運河沿い施設の利用イメージ】

物販施設…閖上地区、名取市の名産品の製造・販売を行う（水産加工品、酒、農産物、工芸品）。

飲食施設…地元水産物、市場で購入した魚介類等をその場で食べられる施設。

・運河の一部には仙台空港からの水上バスも乗り入れ可能とし、停留所も整備する。

・地区復興のシンボルとなる日和山周辺は、メモリアル公園として整備する。

（南）

・約 20ha にわたって広がる花畑とし、閖上地区の新たな観光名所とする。

・ゾーン内に水路、散策路を配置し、水上・陸上両方の視点から景観を楽しめるようにする。

漁港ゾーン

・ゾーン北側に市場、水産加工場といった機能を集約し、市場の観光機能と集客ゾーンとの連携を図る。

サポートゾーン

・転出した居住者の宅地と土地交換した農地の他、高台上の小中学校のグラウンド、集客ゾーン利用者のための駐車場

図 9　【A 案】

【B 案】

収益ゾーン全体を緑と花の公園（入場無料）とし、その中に収益施設(観光市場、レストラン、土産物店等、体験型工場）を点在させる。働いている人や観光客が公園にいる気持ちにさせる。

ゾーン別の考え方（土地利用の方針と景観・利用イメージ）

集客ゾーン　（北）

・市場は沖縄の公設市場のような、やや雑然とした昔風の商店をつくる。市場で買った魚がすぐに食べられるような食堂を作る（ex.千葉県鋸南町保田漁協直営「ばんや」)。

・公園内の建物は、和風の落ち着いた外観（レトロ調）とする。

・地魚、地野菜を売る店以外に、花卉を販売する店を出す。

・閖上地区内に貞山堀から U 字状に水路を設け、市場や観光に直結する港を作る。堀の中は小高い丘とし、そこに太平洋を眺めながら食事が出来る食堂を設ける。堀周辺には花を植える。

集客ゾーン　（北）（南）

アウトドアゾーンとし、地区の生態系を再現したビオガーデンの他、プレジャーボート用マリーナを設置。

漁港ゾーン　：漁港機能の他、ヨットハーバーを再生する。

サポートゾーン

・花卉は、大規模な温室でカーネーション、バラ、キク、トルコキキョウ、ユリ等を栽培し販売する。

　スイセン、フリージア等の地植えの花は、観光客に摘んで買ってもらう。

・メガソーラーを設置して、温室等の農業生産や水産業に使用する（地産地消）

図１０　【B 案】

・住宅地盛土の斜面を利用してスタンドを作り、スポーツや音楽を楽しむ場を提供する
・貞山堀の両岸には、川側から順に低木・中木・高木（桜、こぶしなど東北地方にある樹木）を植え、ジョギングや散策道を整備する

【C 案】

空港に近い立地、運河に囲まれた地区条件、高度利用を前提としない条件を活かし、「持続可能な地球」を体験できる地区とする。

ゾーン別の考え方（土地利用の方針と景観・利用イメージ）

集客ゾーン

・基本的な土地利用は農地とし、その中に宿泊、環境学習、農業体験等の施設を併設した小高台を配置し、避難所としても機能させる。12,800 万人 0.036ha
・日本国内の国民一人当たり耕地面積を基準とし、ゾーン内で生産する食物をゾーン内で消費する人数を制限。国内で生産できる農作物での食生活を体験できる場とする。

＊国内耕地面積　465 万 ha、人口 12,800 万人：一人当たり耕地面積 0.036ha

→ゾーン内消費人数（宿泊客＋施設スタッフ）最大 800 人程度（耕地面積 28.8ha）。

【必要カロリーを満たす食事例】

朝：ご飯 1 杯、粉吹き芋 2 個、糠漬け 90ｇ、昼：焼き芋 2 本、ふかし芋 1 個、りんご 1/4

夕：ご飯 1 杯、焼き芋 1 本、焼き魚 1 切れ　　（農水省 HP より）

・エネルギーについてもメガソーラー等を用いゾーン内完結を目指す。
・地区内の移動手段は徒歩・自転車・動力を用いない舟に限定。

サポートゾーン

・集客ゾーンにエネルギーを供給するメガソーラー施設、転出した居住者の宅地と土地交換した農地の他、高台上の小中学校のグラウンドを整備

図１１　【C 案】

【D 案】

運河に沿った街並みと、メガソーラーによる電力供給。

ゾーン別の考え方（土地利用の方針と景観・利用イメージ）

集客ゾーン

地区内に貞山堀から運河を引き込み、それに沿ってかつての閖上地区に近いスケールの街並みを配置する。

【運河沿い施設の利用イメージ】

物販施設…閖上地区、名取市の名産品の製造・販売を行う（水産加工品、酒、農産物、工芸品）。

飲食施設…地元水産物、市場で購入した魚介類等をその場で食べられる施設。

・運河の一部には仙台空港からの水上バスも乗り入れ可能とし、停留所も整備する。

・地区復興のシンボルとなる日和山周辺は、メモリアル公園として整備する。

新エネルギーゾーン

・約 20ha にわたって広がるメガソーラー施設を設置する。

・メガソーラーにより生み出された電力は、高台市街地への供給及び売電事業に用いられる。

漁港ゾーン

・ゾーン北側に市場、水産加工場といった機能を集約し、市場の観光機能と集客ゾーンとの連携を図る。

サポートゾーン

・転出した居住者の宅地と土地交換した農地の他、高台上の小中学校のグラウンド、集客ゾーン利用者のための駐車場

図１２　【D 案】